



第1号/2020年9月13日発行

新型コロナウイルスの感染拡大を受け、教会での礼拝は休止、従来のような教会での集まりもできない日々が続いています。このような時こそ、私たち外濠教会グループ4教会の信徒同士、互いに日々の気づきや思いを分かち合い、気持ちをひとつにして励まし合えたら……そんな願いをこめて、このたび『そとぼりタイムズ』を発行することとなりました。この『そとぼりタイムズ』が、少しでもコロナ禍を前向きに乗り越える一助となれば幸いです。主にあつて。

外濠教会グループ協議会そとぼりタイムズ編集委員会



礼拝の日を待って

東京に出て来て 67 年間歩んだ道を閉ざされて、礼拝の日を待っています。2020 年 4 月 11 日から毎日健康観察表（体温、血圧など）をつけ、昔のものを片付ける決心をしましたが、広げたままになっています。その中に『うちの宿六』（福島慶子著、文芸春秋新社、昭和 30 年 6 月 20 日初版）があります。その本の表紙の裏に主人 松原学の自筆のサインとメッセージが書かれていました。

「茂のこんごの成長の為に」

July 11st 1955 Francis M. Matsubara

毎晩 9 時前後に聖書を読んでお祈りしています。

いつの間にか 90 歳になり、元気な日々を感謝しております。



東京聖テモテ教会 マリア 松原 茂



キリストの平和と希望と光がありますように

聖バルナバ教会は 1878 年創立の東京教区の中でも 5 本の指に入る程の歴史のある教会です。

その辿ってきた道のりに思いを馳せる時、感慨もひとしおです。

私が聖バルナバ教会に初めて伺ったのは、昭和 44 年（1969 年）頃ですので、もう 50 年以上も前のことになりますが、聖バルナバ教会の長い歴史の中では、まだ 3 分の 1 にも届きません。

当時は畳の聖堂でした。いろいろな方とお話をしますと、「バルナバ教会、あの畳の聖堂によく行きました」というお声をよく伺いました。そんな風に皆さんに親しみをもって頂いていたのだと感じます。また、半間程の玄関がイースターやクリスマスには履物があふれるほどになっていたことを思い出します。

戦後の仮聖堂であったので、建築資金のために紙ナプキンを売ったり、教会の経済が厳しいので、横地神父さまが外壁をお手ずからペンキを塗って下さったりと、聖堂建築のために営々と努力して下さいましたお陰で今日があります。

私が知る前にも後にも、本当にたくさんの聖職の方々、信徒の方々の関り、お働き、思いがあり今日に至っているのだと思います。神様に、また多くの方々に感謝しつつ、私は今聖バルナバ教会で祈り続けていられることの幸せを感じています。

牛込聖公会聖バルナバ教会 鵜飼久美子



* * * * *

南ドイツ・オーバーアマガウのキリスト受難劇とコロナ

世界最大のキリスト受難劇「オーバーアマガウのキリスト受難劇」は、10 年に一度西暦の末尾がゼロの年に人口わずか 5 千人の南ドイツの小さな村で行われます。今年 2020 年は開催年に当たりますが、コロナのため 2022 年に延期となりました。

ご存知の方も多いと思いますが、1632 年ヨーロッパでペストが大流行した際、この村は惨禍を免れることが出来たことを感謝し、翌々年の 1634 年から 10 年に一度、何と今までに 380 年以上受難劇を上演し続けて来ています。

私たちは前回 2010 年に同村を訪れ、受難劇を鑑賞することが出来ました。アルプスの山々に囲まれ、美しい自然とフレスコ画の村は、5 月から 10 月までの約半年は訪問客の受け入れを行い、村人の半数 2,500 人は上演に総動員されることになります。上演は夕食を挟んで前半と後半の 6 時間に亘ります。4,500 人収容の劇場は太陽が沈み、夕暮れとなると舞台が野外劇場と化し、夜の静けさが演出されると共に、イエスキリストの受難と復活の聖書の世界となります。

オーバーアマガウも新型コロナウイルスの感染対策で今年はキリスト受難劇の公演を延ばさざるを得ないということですが、当時チャンスがあってイエスキリストを演ずるドイツの青年と話が出来ました。その時のエピソードを最後にご披露させていただきます。

現地の宿や食事のテーブル席も村の管理委員会から決められていて、我々がその青年に会うと説明すると同じテーブルのドイツ人夫妻が、どうしても「キリスト青年は結婚するのか」聞いて欲しいということで、思い切って聞いてみました。しかる処、彼は結婚していたのです。何と昨年 12 月 25 日に長男が誕生したとのことで、実は私たちの孫も同じ日に生まれており、この偶然の出来事に驚き、将来 12 月 25 日生まれの子の出会いが実現することを望みながら別れたのでした。

2020 年 8 月 16 日 目白聖公会 アンブローズ佐藤勝彦・キャサリン佐藤昌子

みことばを大切に

“新型コロナウイルス”、マスコミの情報で現実を知り不安がいっぱいだったけれど、受け止めてしっかり予防し合うしかないと思った。

公祷の“礼拝休止”に「そうだよね～」と思った。でも、Webなどでみことばをたくさん頂けたし分かち合うこともできた。気持ちが落ち込まず元気を頂いた。みことばは私の中でほんとうに大切なものだった。自粛でいろいろそぎ落としたが。長引く感染症拡大が収束に向かうことを切に祈っている。



T.M.U((8/12 記)

2020年のみんなでつくる クリスマスパーティー

みんなでつくるクリスマスパーティーは、今年第20回の予定でしたが、コロナウイルスの影響で、例年通りの開催は困難になってしまいました。

そこで今年はビデオメッセージの配信やカードなどをお送りするなどの企画を考えています。皆さんといっしょに素敵なパーティーをお届けしたいと思います。企画からのご参加もお待ちしています。

「公祷休止期間中」の過ごし方

東京諸聖徒教会 小川清恵

自粛期間中は週に一度くらい郵便物整理、留守番などで教会に来ていました。一仕事終わってだあれもない礼拝堂に座って静かな時を過ごします。最近の出来事、今の状況のこと、考えていることなど、ただピューに座って聖画を観ながら神様に話しかけるのが大好きです。そうすることで、ざわざわした心が落ち着きます。

もう一つこの期間に学んだことがあります。ZoomとYouTubeです。言葉は聞いたことがありましたが、何のことか知りませんでした。それらをテモテ教会と合同でのZoom礼拝とYouTubeでの「主教司式の聖餐式」で学ぶことができ、現代社会の通信手段に疎いオバサンには大きな収穫でした。

【自粛短歌もどき】

復活日から聖霊降臨日までの間に、六五の「短歌もどき」ができて、主との対話になりました。

東京諸聖徒教会 長濱晴子

- ◆ 離れてもネット礼拝続くなか 神への道はより近づける
- ◆ 手を止めて八時二十時主の祈り 力を求め心静かに
- ◆ 信じると道と真理に近づける 判って判る信じて判る
- ◆ 内にいる神は私の心身に 希望忍耐勝利するまで
- ◆ 今日もまた無事で無事でとただ祈る 医療従事者感染せずに
- ◆ 群青の夜空に満月輝いて 心を洗い地球洗って

〈そもそも〉の日々

今年になって新型コロナウイルスで生活が激しく変わった。勤務の学校の授業がリモート授業に。日曜日の礼拝が動画配信に合わせての自宅での礼拝に。人との付き合いには不要不急の制限が。〈そもそも〉、授業とは何か。礼拝とは何か。人との付き合いとは何か。このウイルス対策の生活の変化で、日々、〈そもそも〉の問ひかけの嵐に見舞われている。しかし大切な問ひかけの日々でもある。

SKT



まだまだ投稿募集中です！
投稿は所属教会、または
東京諸聖徒教会まで。
次号もおたのしみに！

いろいろ読んでみませんか/本の紹介①

東京聖テモテ教会 クリストファ 横山 融

コロナ禍の期間、いつもより本を読む機会が多かったようです。以下に紹介しました本はこの 2 年ほどで手にしたものです。信仰を深めることに直接つながらないかも知れませんが、キリスト教の周辺情報を得るのも有意義なことと思います。これから読まれる方にネタバレになるといけませんので、各本ともひと言ずつ紹介させていただきます：

1. ユダヤ人とユダヤ教（岩波新書 1755、著：市川 裕）

イエスキリストを生みだしたユダヤ教について、日本人クリスチャンにはごく一部の情報しか共有されていない。東方ユダヤ教のイスラム教発展との深い関係や世界に広がるユダヤ教徒の生き方、イスラエル建国などについて多方面からの解説が興味深い。

2. キリスト教と日本人—宣教史から信仰の本質を問う—（ちくま新書 1424、著：石川明人）

戦国時代のキリスト教神学には、日本人には受け入れられない矛盾があった。明治以降も信仰は、学び理解するものとの理解であった。宗教は「信じる」ものであるか。

3. 多神教と一神教—古代地中海世界の宗教ドラマ—（岩波新書 967 著：本村凌二）

エジプトで、世界で初めて一神教が起こったといわれている。多神教から一神教が成立することの妥当性を知る事はクリスチャンの信仰理解に役立つ。

4. 宗教改革の物語—近代、民族、国家の起源—（角川ソフィア文庫/角川文庫 21428 著：佐藤 優）

「捨て石」となったヤン・フスの功績を、キリスト教徒は知らなすぎる。宗教改革は一部の宗教家の功績ではない。

5. 科学者はなぜ神を信じるのか —コペルニクスからホーキングまで— （講談社ブルーバックス B-2061 著：三田一郎）

「神とは何か」と「自分とは何か」は常に問い続けるべき課題である。近代哲学は十分に現代人を満足させていない。

6. 信長と十字架—「天下布武」の真実を追う—（集英社新書 O225D 著：立花京子）

信長の天下布武（全国制覇）は、南欧勢力によるグローバリゼーションの一端を担っていた。イエズス会を裏切った信長は本能寺の変で葬られた。

7. 潜伏キリシタン—江戸時代の禁教政策と民衆—（講談社学術文庫 2546 著：大橋幸泰）

江戸時代に禁止されたのはキリシタンだけではなかった。明治 6 年にキリシタン禁制の高札は撤去されたが、戦後まで多くの宗教は「信教の自由」を得ることはなかった。

8. ユダヤ五〇〇〇年の知恵 —聖典タルムード発想の秘密— （講談社+α 文庫 P740 著：ラビ・M・トケイヤー、訳：加瀬英明）

ユダヤ教聖典「タルムード」は、ユダヤ人の生活そのものを描いている。宗教書というより、生活指針そのものである。